

方々歩いて旅すれば
いろいろな出会いと
発見がある。
見て聞いて歩いた
まちの旅日記。

まちを歩く

Vol.7

紀州天音山道成寺②

〔後編〕

脈々と続く1300年の歴史

和歌山県日高郡川辺町

文・写真 岡部知子

〔収録〕 和歌山県日高郡川辺町



▲位置図



▲エピソードを守り続ける三重塔



▲美しい姿の講堂

参道に並ぶ土産物屋をすぎると石段があり、それを上ると仁王門が構えている。「道成寺」の建造物は、本堂・護摩堂・縁起堂・仁王門・三重塔・宝佛殿であり、1300年の年月を生きたこの寺には、豊かなエピソードが語り継がれている。

まず「石段」。切り石で組まれた石段を62段上ると仁王門が口を開けている。石段の手前100mほどの参道に立ち仁王門を見上げる。目線は門の空間を突っ切り、その延長線上には「本尊」の顔が見えるようになっていく。表現を変えるなら、

その両脇にある法面の面積を変形にしたのである。最上部は約150cmの幅に対して、上り始めの1段にあたる法面の幅が30cmほどしかないのである。説明するまでもないが、「遠近法」である。下から上を見上げたときの先細り現象。こ同輩以上の方々なら察していただけたと思うが、生唾を飲み込んで第一歩を踏み出す……あの一瞬をここで感じることはない。

「三重塔」が再建されて240年の歳月が流れた2004年の秋、切目川の上流の町「高串」の

「本尊」が参道の人々を見守っているのだともいえる。寺が建立されて約千年の間は「割り石」の石段であった。1700年に仁王門は再建されたが、それを機に石段は「切り石」へと変えられ、そのときの石工が造りにちよつとした工夫を加えた。石段そのものは下から上まで平行を保っているが、

区長さんが道成寺を訪れた。「切目川ダム建設のため、道成寺から来た神様が水没してしまうので、こちらで引き取ってもらえないか」と相談にやってきたのだ。寺側はあわてた。急ぎ古文書を開いて見ると確かにあった。題目に「切目庄高串村妙見社」と書いてある。が、読めない！

古文書に詳しい地元の先生に読んでもらい事の全容が分かった。当時、三重塔再建するにあたり心柱にできるほどの大木が調達できずに苦労していたところ、川の上流にあった妙見神社に松の大木があることを知り、神社側へ寄進してもらえないかと申し出ると「わかりました。差し上げます」と二つ返事。切り株の跡に祠（ほこら）を建て「御神木」の御霊は治められた……概略こういうことが書かれていたという。松の生育には時間がかかる。しかも「大木」。そして「寄進（タダ）」。時代が違う！とはいえなんとも気持ちのいい話である。そして間もなく高串地区はダムの底。三重塔はこれからも建ち続け、人間の「発展・進歩」とやらを見続けている。

「宝佛殿」の内部には、国宝3点、重文11点、県指定文化財4点が収められている。これだけの仏像がひとつの部屋に収められている様子を文章で表すことは難しい。大半が平安時代の作品なのだ。これは立派な博物館といってよい。しかし、元はそれぞれの建物で役目を果たしていたはずの仏像たちが今はここに集合している。何故だろう……。その疑問に院代の小野さんが答えてくれた。「1300年の歴史上、火災消失という記録はありません。道成寺は奈良時代の建立で、『法隆寺型』（正確には法起型）であるということは当時として、



▲仁王門より参道を見る・石工の遊び心。法面は上の方が緩かに広い



▲本堂



▲桜と本堂の調和には心が和む



▲仁王門の仁王像

最大級の規模であったということです。要は、時代が下がるとともに建物の維持管理ができなくなり、解体しては仏像を一箇所に集めた……というのが実際でしょう」と語ってくれた。寺を守る厳しきの一部を学んだ気がする。日々の変化には疎くても、百年単位で教えてくれる仏像達に「いろいろあったんだねえ」とつぶやきながらシャツタ―を落としていた。

院代・小野俊成さんは43歳。次期「住職」を勤める要職にある。そうなれば15代目住職ということになるのであるが、ここ道成寺の歴史には戦国の時代(天正)以前の文献が消滅しているためそれ以前の住職の名前すら判らないのだという。父の成寛(住職72)は芸大出身で美術への造詣が深く、屋根瓦付の収蔵庫は先駆の実績を残している。発掘時に出土された瓦を見て、奈良(瓦宇)の小林章男さんが「平城京とか南都七大寺の時代物。すばらしい！」と絶賛したのだという。だからというわけではないが、将来小野さんは「収蔵庫」・「念仏堂」を合体。さらに大きな「木造建築計画」を夢見ている。けれどそれは80〜100年後のことである。

だから、今現実に出来ること、確実に次世代で成就させるためにも、「収蔵庫」・「念仏堂」に葺かれている瓦は、「同寸法で軒瓦の蓮弁の弾力がある」といわれる8世紀型に揃えているのだという。今回、住職にお会いすることはなかったが、前述の時代をまたぐ計画などはやはり住職の考えであろう。時代の大意は住職から院代へ伝承される。それは、父から息子への引継ぎでもある。道成寺は、「南都六宗三論・法相・華嚴・律・成実・俱舎」とある宗派の中で法相宗(ほっそう)であった。全国の国分寺が天台宗か真言宗に改宗されていったその時代、道成寺も押され真言宗になったのであるが、再び改宗され現在の天台宗となったのである。そういうことで、比叡山が修行・勉強の場である



▲御本尊の千手観音様



▲宝佛殿には二十数体の後仏像がまつられている

のだが、道成寺に限らず少人数で運営をしている寺の実情は深刻で、境内にある建物、施設の管理におわれているのが事実。「歴史を重ねて受け継がれたすべてのものを、精一杯の努力で寺を守っている……。これほどの修行はほかにない」と院代は言い切る。「答えは本山が教えてくれるのではなく、各々の寺がそれぞれに合うやり方を見つける必要がある」とも付け加えて話してくれた。

参道にある「土産物屋」。店じまいの時間は意外と早い。同年代に見える女性に話かけると気さくに話をしてくれた。この参道一帯が沼地であったことや、親兄弟4家族が一つ屋根の下でくらししていること、息子の趣味で栽培したライチ(れいし)

が店先で売れるようになったとか……院代さんは外国語が堪能で、スゴイお方です！ などなど話が盛り上がりつつ、隣や向かいのおかみさん達も合流、まるで自分の家族の自慢をしているかのような、道成寺博士の集合であった。数ある逸話の中で、今でも微笑んでしまうエピソードがある。「インダイさんがなあ、大酒飲んでこの参道で寝てましたん！ ぐーぐーと！ こっつ！ 真ん中で！」といかにも嬉しそうに話してくれたことが、小野さんの真面目な印象と見事にマッチしていた。私にお酒が飲めたなら……きつとご一緒できたのに「残念！」。

おかべ・ともこ